



ボクだけのくノ一姉妹

羽沢向一

illustration ©有子瑤一

美少女文庫
FRANCE & SHOIN

第一幕



双子姉妹く幼なじみは守護忍者

「んー、ここはだいたいこんなもんかな」
くさかべまさととき

草壁真時は地下室に並ぶ複雑な機械をざっと眺めて、気がついたダイヤルのいくつかを指先でいじった。機械からわずかにもれる音に耳を傾かたむけて、音色が微妙に変化するのを聞き取る。

「いい感じだ。これでよし」

満足してうなづく顔が、光沢のある機械の表面に映った。さっぱりしていることだけが特徴の短い髪の下に、平凡で人のよさそうな目鼻口の造形がある。青いTシャツと緑のジャージのパンツに包まれた体も、高校二年生としては平均的な体格だ。引き締まった体つきだが、スポーツマンという雰囲気ではない。

真時はてきばきとダイヤルやレバーをいじりながら、地下室の奥で作業をしている

父へ声をかけた。

「父さん、そっちはどう？」

「ああ、いつも通りだ。もう、終わる。そろそろ母さんたちが呼ぶ頃だな」

真時に似た、やや腹の前に出た中年男が答える。息子とおそろいのＴシャツとジャージのパンツを着た草壁嵩時は、慣れた指さばきですばやく機械を調整していく。アパレルメーカーで会計をしているとは思えない手つきだ。

父子がともに作業の結果を確認しているときに、頭上からさわやかな女の声が聞こえた。

「お父さん、真時、もうすぐ朝ご飯よ」

二人は地下室の天井を見あげると、嵩時が息子をうながした。

「真時、先に行け。私はもう少しだけ見ておくよ」

「じゃあ、お先に」

真時は地下室の中央にしつらえた急角度の階段を上がり、天井の跳ねあげ式の扉を押した。正方形の出入口が開き、真時は地下室の天井イコールキッチンの白い床から顔を出した。

「あ……」

胸から上をキッチンに生やした真時は、目の前で左右に動く三つのものを見せつけ

られて、体を硬直させてしまった。

三つの魅力に満ちた尻が綺麗にシンクロして、右に左に揺れている。

真時に背を向けて、三人の女性が横に並んで料理を作っているのだ。尻で同じリズムを刻み、軽快な歌をハモらせながら、手際よく朝食の用意をしている。

真ん中でテンポよく包丁を上下させて、キャベツを千切りにしているのが、真時の母親の草壁雨音^{くさかべあまね}。真時を二十五歳で生んだ雨音は、今年で四十二歳になるのだが、後ろ姿はとてもそうは見えない。

純白のTシャツと鮮やかなブルージーンズのショートパンツで飾った肉体は、二十代後半でも通じる美しいプロポーシオンと肌の張りを保っている。とくにウエストはすっきりと絞られ、対照的にショートパンツに包まれたヒップは高く持ちあがり、ジーンズの生地が破れそうに張っている。

ストッキングなど穿いていない両脚は、太腿がむっちりと太く、ふくらはぎから足首へはしなやかに伸びた。

プロポーシオンは若いが、全身から年齢ならではの熟した艶やかさをもしだしている。とくに主婦らしくまとめた後ろ髪からのぞくうなじのなまめかしさは、肉体を磨きあげた年月の賜物^{たまもの}だ。親子の血のつながりがあっても、真時は母親の肢体に女の魅力を感じないではいられなかった。

雨音の右側で、ボウルで卵を溶いているのは疾風狭霧。はやてさぎり

左側で、ベーコンを焼いているのは疾風吹雪。はやてふぶき

二人は草壁家の右隣の家に住む双子姉妹だ。真時と同じ高校二年生の十七歳で、赤ん坊の頃から互いによく知っている幼なじみだった。中学に入学した頃から、狭霧と吹雪は草壁家の食事を手伝うようになり、今では朝食の半分は双子の手料理となっている。

姉の狭霧は、ボーイッシュな短いショートカットが後ろ姿でもかわいらしい。

すっきりした髪型にふさわしく、白地に青い横縞を引いたTシャツに、白いショートパンツというスタイルだ。シャツは大きく裾を切った過激なデザインで、背中の下半分が丸出しになっている。前にまわれれば、乳房のすぐ下まで見えるに違いない。

ショートパンツも負けずに小さい。ブルマーかと思うほどに裾が短く、白い布が尻にびったりと貼りついている。おかげで高く持ちあがった尻たぶの形や、内側のパンティのラインが、真時の瞳にくっきりと映った。

妹の吹雪は、姉とは対照的な長い後ろ髪をひとつにまとめて、鮮やかなポニーテールにしている。

黒髪と重なったTシャツは白地にピンクの横ストライプ。腰から下は細かいプリーツを刻んだ白いスカート。姉とは違って、背中は見せていないし、スカートの裾もふ

くらはぎまである、おとなしい格好だ。それでも尻でリズムを刻むたびに、プリーツの表面に尻たぶの絶妙なラインが浮かびあがった。

一卵性双生児であることを強調するように、狭霧と吹雪の体形はそっくりだ。全体が女らしい丸みを帯びて、手で触れればどこもかしこもとてもやわらかいに違いないと、真時に確信させる。

狭霧の大きく露出した背中や、吹雪の手足の肌は、きめ細やかで、ほとんど日焼けを感じさせない。雨音の完成された女体と比較すればまだまだ未成熟だが、息子の目には同年代の二人のほうがより魅力的に映った。

(うわあ)

と、真時は胸の内でも声をあげていた。記憶に残らないほど小さい頃からいっしょに遊んできた双子だが、こんな魅惑のダンスを見せつけられては、男として股間がむずむずしないではいられない。床から胸を出した状態のまま動きをとめて、三つの尻の動きをじっと見つめつづけた。

ふいに姉の狭霧が、身体をひねり、顔を真時へ向けた。顔にアメリカ製のアニメの牝猫を思わせる笑みを浮かべて。

「まっくん、なーにをじーっと見つめてんの？」

両手を尻たぶにぴっちりとは貼りついたショートパンツに当てて、表面をさわさわと

撫でまわす。

「ボクのお尻、見惚^{みと}れるほどセクシーかな？」

右のレッグホールに指を引っかけて、キュッと吊りあげる。女らしくふつくらとした尻たぶの半分以上があらわになり、肌の白さが真時の目を射た。

「ああ！」

と、声をあげて、真時はますます固まった。からかわれている、とわかっている、目をそらすことはできない。

（パンティが見えない！　もしかして狭霧はTバックなのか！）

実際にはパンティもいっしょにあげただけだが、十代の妄想はふくれあがる。現実のエッチな光景にイメージを重ね合わせる真時の耳に、もうひとりの声が響いた。

「お姉ちゃん、なにやってるの！」

妹の吹雪が手をとめて、キッと横顔を姉の狭霧へ向けた。

「まあくんが相手でも、はしたなさすぎるわ」

吹雪は姉とは微妙に異なる発音で真時の呼び名を口にする。

顔を向かい合わせると、いよいよ二人が一卵性だと思い知らされた。

完全に同じ顔だ。

すっきりした輪郭の顔に、少し太い眉が同じ長さ、同じ角度で引かれている。

眉の下の目も、同じやわらかい光を宿らせる。

まっすぐな鼻筋も、ふっくらした唇もまったく同じ。

ショートカットとポニーテールが双子を区別する唯一の印だった。髪型以外はまさに鏡に映したように見える姉妹の顔は、春の陽だまりのよう暖かい空気をかもしだしていた。狭霧と吹雪という名前にはふさわしくないが、魅力的な美貌であることには間違いない。

同じ顔をしているが、真時は狭霧の表情からは子猫の印象を受け、吹雪の表情からは子犬のイメージを感じた。近所の人々も高校の同級生も見分けられない双子を、難なく判別できる。

真時に向けられた身体の正面は、後ろ姿以上に女らしいまろやかなラインを描き、^{はっらつ}潑刺とした若さを乗せている。Tシャツを押しあげて、ストライプを湾曲させている胸は、本人たちの申告によればそろってDカップだという。しかし全体のシルエットが細いので、それ以上に大きく感じられ、女の魅力をあふれさせた。

「もう、早くお尻を隠して」

吹雪は、姉のずりあがったショートパンツを元に戻そうと、右手を狭霧の尻へ伸ばした。しかし吹雪の手に狭霧の両手がすばやく交差して、正面から妹のプリーツスカートをつかんだ。

